

江戸時代の百間本村

~宿•川島•切戸~

期間 平成 28 年 7 月 16 日 (土) **5** 平成 28 年 10 月 23 日 (日)



開催にあたって

宮代町郷土資料館では、平成2年度から15年度にかけて宮代町史の編さん事業を実施し、宮代町の歴史を語る上で重要な古文書を発見してきました。須賀村戸田家文書や百間中島村岩崎家文書、百間村折原家文書、東条原村岡安家文書などの江戸時代の名主家文書です。そして、宮代町の歴史が少しずつ解明されてきました。

今回の企画展はこれらの古文書の中から百間本村(もんまほんむら)にスポットをあて、江戸時代の百間本村について詳しく解説します。百間本村は百間村ともいわれ、埼玉郡百間領27ヶ村(現在の久喜市・白岡市・宮代町・春日部市の一部)を代表する村でした。また、佐倉藩領の埼玉郡(羽生市・加須市・久喜市・宮代町の一部)を代表する村でもありました。

なお、江戸時代の百間本村は住所では山崎の一部と百間1~6丁目を中心とした 範囲です。行政区では宿、川島、切戸などにあたります。この他、姫宮の一部や西 原の一部も百間本村でした。宿は字山崎の一部、川島は百間4丁目付近、切戸が百 間1丁目付近にあたります。

展示内容は、江戸時代から明治時代の百間本村内の様子や寺院、神社、村役人の変遷、佐倉藩が百間村に出した先触や廻状などで当時の百間本村の状況が分かるような古文書や絵図などを展示いたしました。あわせて、江戸時代以前の百間本村についても触れ、板碑などの遺跡から出土した遺物も一部展示しています。是非ご覧下さい。

平成28年7月16日宮代町郷土資料館

凡例

- 1. 本書は平成27年7月16日から10月23日にかけて開催する宮代町郷土資料館企画展「江戸時代の百間本村〜宿・川島・切戸〜」の展示図録です。
- 2. 本書並びに展示した写真は、当館学芸員河井伸一が撮影しました。
- 3. 本展示会の企画及び執筆・編集は河井伸一が担当しました。展示は資料館職員等が協力して行いました。
- 4. 資料提供・協力者等(順不同・敬称略)

国立公文書館、(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団、折原静佑、建設省国土地理院、青木秀雄、 青林寺、宝生院、小松寺、西光院、長谷川清一、岩崎文庫

室町・戦国時代の百間郷

「百間」という文字が初めて出現するのは、応永21年(1414)の宝生院所蔵の鰐口です。ここには「武州太田庄南方百間姫宮鰐口(わにぐち)」とあります。この鰐口は明治時代初期までは姫宮神社にありましたが、神仏分離の際に姫宮神社を管理していた宝生院の所有となりました。この他には、延文6年(1361)の市場之祭文写があります。ここには「武蔵州太田庄南方はさま市」とあり、この「はさま市」が百間市ではないかという説です。

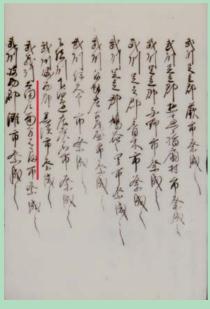
理由は、太田庄南方という地域は百間や慈恩寺(さいたま市岩槻区)など狭い地域を示すことやこの文書が写しであるため写し間違いの可能性があるためです。

戦国時代になると天文 22 年(1553)の西光院雷電社の「太田庄南方百間山光福寺 之内雷電宮」や永禄 13 年(1570)の北条康成書状の「百間西光院」、元亀 3 年(1572) の北条家印判状写の「百間之内」、天正 14 年 (1586) の北条氏房判物の「百間六供之事」、 天正 16 年の北条氏房印判状写の「百間百姓中」、天正 19 年の徳川家康印判状の「寄 進百間」、年未詳ですが戦国時代末期とみられる願行流血脈(がんごうりゅうけちみゃ く)の「文間ノ西光院」で「百間」の文字が確認できます。この他では文政 8 年 (1825) の諸家系譜(服部)に天正 20 年に徳川家康が家臣の服部政季に「武州太田庄之内百 間郷三千石」を与えたとあります。

このように百間は室町・戦国時代から存在した郷村でしたが、その中心は西光院付近の東地区でした。そして、江戸時代中期になると、百間の中心は東地区から宿地区を中心とした百間本村へ受け継がれました。



宝生院鰐口「太田庄南方百間 姫宮鰐ロー口」(宝生院)



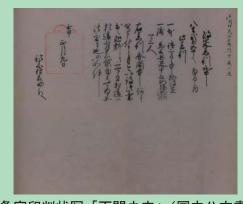
市場之祭文「太田庄南方はさ ま市」(国立公文書館)



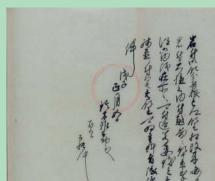
西光院雷電宮鰐口「太田庄南 方百間山光福寺」(国立公文 書館)



北条康成書状「百間」(西光院)



北条家印判状写「百間之内」(国立公文書館)





北条氏房判物「百間六供」(西光院)

北条氏房印判状写「百間百姓中」(国立公文書館)



願行流血脈「文間西光院」(小松寺)



江戸時代以前の宿地区

百間本村は現在の行政区では宿、川島、切戸地区にあたりますが、江戸時代以前の遺跡が確認されているのは宿地区のみです。宿地区の宿源太山遺跡からは縄文時代早期後半(約7,000年前)、前期前半(約5,700年前)、中期後半(約4,000年前)、後期前半(約3,700年前)、古墳時代前期初頭(約1,700年前)の土器、鎌倉・室町時代の遺物が出土しています。特に古墳時代前期初頭の土器は弥生式土器に繋がる土器で、宮代町でこの時代の遺跡が発掘されているのは宿源太山遺跡が唯一です。

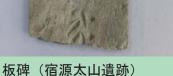
中世と呼ばれた室町・戦国時代には宿地区には集落が営まれ、主要な街道が集まっていました。岩槻道や慈恩寺道、篠津道、杉戸道、粕壁道などです。宿地区の周囲の道路には宿場に見られるクランク(桝形)なども多く、中世の村落の景観が広がっていたと推定されます。

宿源太山遺跡からは、元徳4年(1332)銘の逆修(生前供養)板碑や初鋳が1086年の北宋銭の熙寧元宝(きねいげんぽう)が出土しています。発掘調査では、戦国時代の遺物は発見されませんでしたが、宿地区の住民の多くの菩提寺でもある青林寺(しょうりんじ)には戦国時代前期の板碑や宝篋印塔(ほうきょういんとう)、五

輪塔が納められています。宿地区の畑などで発見されたものが青林寺に納められた のでしょう。なお、切戸地区の池上家墓地にも板碑が1基確認されています。









古銭 (熙寧元宝) (宿源太山遺跡)

古墳時代前期の土師器(はじき)の坩(かん)(宿源太山遺跡)

太田庄南方と百間領

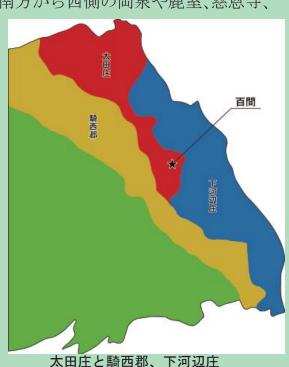
太田庄は平安時代後半に太田行尊という豪族により開発された荘園です。その後、 鎌倉時代には鎌倉北条氏領、室町時代には上杉氏や足利氏などによる戦乱の場所で した。室町時代や戦国時代になると「太田庄南方」という名称が見られます。百間 や慈恩寺、吉羽などが太田庄南方に属していました。太田庄は北方と南方に分けら れていたようです。羽生の永明寺の薬師如来像の背銘に太田庄北方とありますので 羽生市や加須市は太田庄北方に属しました。

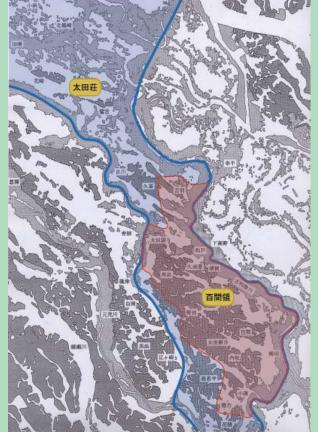
太田庄の庄域を見ると鷲宮や久喜周辺で括れています。この地域を境に北方と南

方に分けられていたのでしょうか。太田庄南 方と百間領の範囲は若干異なります。

太田庄南方から西側の岡泉や鹿室、慈恩寺、

南側の花 積、道順 川戸、蛭 田を除い た範囲が 百間領で した。



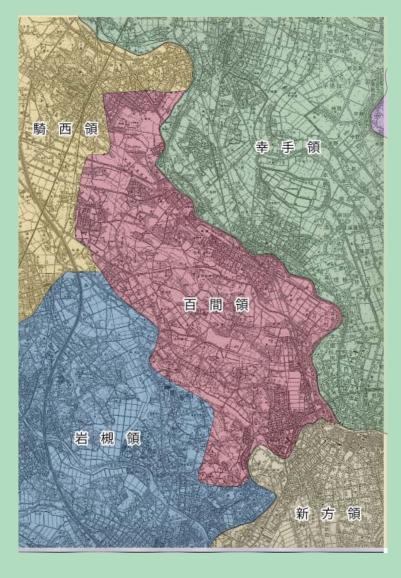


太田庄南方と百間領

百間領

百間領とは江戸時代に設定された領域で、国内(武蔵国)を郡(埼玉郡)に分け、更にその中を領に分けていました。領は一般的には戦国時代の城郭付けの領地(城領)や荘園などを引き継ぐ古い名称といわれています。

百間領は、埼玉郡内の9つの領 (岩槻領・八条領・新方領・百間領・ 菖蒲領・騎西領・向川邊領・羽生 領・忍領)の一つで、宮代町の百 間を中心に北は久喜市の吉羽や太 田袋、宮代町の和戸、西は白岡市 の高岩、上野田、太田新井、南は さいたま市岩槻区の徳力、小溝、 春日部市の内牧、梅田など27ヶ 村から成り立っていました。



百間領は主に天領や旗本領が多かったようですが、久喜藩(佐倉藩)や岩槻藩、川越藩などの藩領もありました。百間領の周囲には北側から西側に騎西領、西側から南側に岩槻領、南側に新方領、東側に幸手領がありました。新方領は荘園(新方庄)の名称を、騎西領、岩槻領、幸手領はそれぞれ戦国時代の城郭や城領をあらわすものと推定されます。

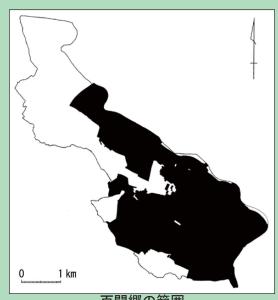
このようなことから、「百間」も戦国時代の城領などを引き継ぐ由緒正しい名称であったと推定されます。なお、百間本村は百間領27ヶ村の筆頭村で、百間領を代表する中心的な村でした。

百間村と百間本村

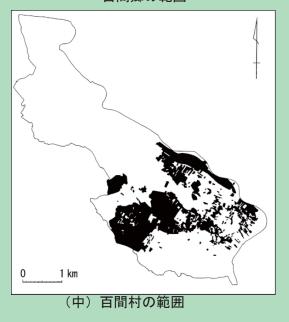
百間村は戦国時代百間郷と呼ばれ、昭和30年まであった百間村(蓮谷を除く)と 大字須賀(学園台・本田なども含む)を合わせた範囲でした。その後、百間郷の領 主であった旗本服部氏が浜松市周辺(静岡県)に転封され、検地が行われたことで 百間村と須賀村は事実上分かれたようです。

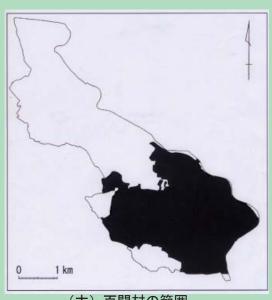
江戸時代中期の元禄8年(1695)には百間村は、新しい百間村、百間東村、百間中村、 百間中島村に4分割されました。新しい百間村は更に元禄11年に一部が岩槻藩小笠 原氏領となり、更に残された天領(幕府直轄地)が久喜藩米津氏領となり、事実上 2分割されました。この久喜藩領(後の佐倉藩領)の百間村を別名で百間本村と呼 びます。岩槻藩小笠原氏領はその後、旗本森川氏と旗本松波氏の領地となりました。 旗本森川氏の領地を百間西原組、旗本松波氏の領地を百間金谷原組と呼びます。

このように百間村は、須賀村を合わせた百間郷、元禄8年の分村以前の百間村、4 分割された百間村、久喜藩領や佐倉藩領であった百間村(百間本村)、更には明治22 年に百間7ヶ村が合併した百間村と5段階に渡り範囲が変わりました。ここでは、 分かりやすくするため、元禄8年の分村以前の百間村を「(大) 百間村」、4分割され た百間村を「(中) 百間村」、久喜藩や佐倉藩領であった百間村を「百間本村」、明治 22年に百間7ヶ村が合併した百間村を「百間村」と使い分けます。

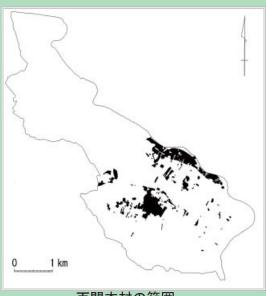


百間郷の範囲





(大) 百間村の範囲



百間本村の範囲

江戸時代初期の百間本村

現在の宿地区の形成は、伝説では松永源太左衛門の祖先の松永弾正が元和年中 (1615~1624) に百間村に落ち延びて来てからといわれています。しかし、粕壁、慈恩寺、杉戸、久喜など近隣の町場へ行く道路上に立地する上、各方面への分岐点でもあったことから、戦国時代には交通の要所として集落が発達していたと推定されます。

切戸地区の池上家墓地にも室町時代以前と推定される板碑が残っていますので、 集落があった可能性もありますが、基本的には切戸・川島地区は自然堤防上の集落 なので、利根川本流が古利根川から移動しはじめる戦国時代末期から江戸時代初期 に形成されたと推定されます。

文禄元年(1592)には徳川家康の家臣である服部与十郎政季が百間郷 3,000 石で配置され、西原に百間陣屋を築きました。この陣屋に対する「後」なのか、江戸時代前期、宿地区は「後宿」と呼ばれ、江戸時代中期には名主の松永源太左衛門の名前から「源太宿」と呼ばれました。現在は地区を「宿」と呼び、源太左衛門の屋敷があった周辺の場所を「源太山」、東西の直線道路を「馬場」と呼びます。

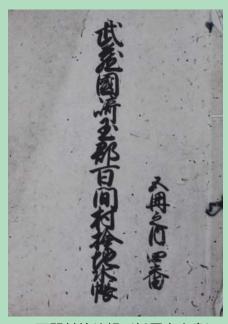
服部与十郎政季は長男の権太夫政信に家督を譲りました。元和5年(1619)、政信は遠江国敷知郡(静岡県浜松市周辺)に転封となり、天領となったため検地が行われました。その後、寛永元年(1624)百間村は旗本朽木氏、旗本池田氏、旗本永井氏に三分割され、後の百間本村は旗本朽木氏の領地に属しました。

江戸時代中期の百間本村

江戸時代中期の元禄8年(1695)に(大)百間村は4分割され、(中)百間村では 改めて検地が行われました。この検地帳には5人の名主の名前が見られることから、 (中)百間村内は5組に分かれていたようです。小左衛門組(源六組)が後の百間金 谷原組、重右衛門組が後の百間西原下組、半右衛門組(吉右衛門組)が後の百間西 原上組、伊左衛門組が不明、源太左衛門組が後の百間本村です。

源太左衛門組(百間本村)のみで「百間村」と記される最も古い文書は元禄11年の新検水帳書抜百姓一人別名寄帳です。次は元禄16年の日光御成海道道拵免除願です。この文書には天領であった百間本村が久喜藩領になると記されています。

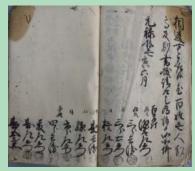
このように、(中) 百間村が久喜藩領と岩槻藩領に分かれたことで、事実上、百間本村は成立したと考えられます。











百間村新検水帳書抜百姓壱人別名寄帳 (折原家文書)

百間本村について

江戸時代から明治時代初頭の百間本村で人が住んでいた地区は、現在の行政区でいうと宿、川島、切戸、姫宮の一部、西原の一部でした。元禄10年(1697)では戸数29軒(宅地は34軒)、元禄11年では戸数31軒、弘化2年(1845)頃では戸数46軒、嘉永2年(1849)では戸数44軒、安政4年(1857)では戸数48軒、人口281人、慶応2年(1866)では人口281人、慶応3年では戸数42軒、人口280人、明治4年(1871)では戸数51軒、明治7年では戸数56軒、人口352人、明治9年では戸数64軒、人口361人、明治22年には人口428人、昭和45年(1970)では人口3,247人(山崎地区を含む)、平成28年(2016)では戸数1,270軒、人口2,962人(山崎地区を含む)を数えます。

江戸時代初期は(大)百間村に属し私称で「後宿村」と呼ばれていました。その後、元禄8年(1695)、(大)百間村が4村に分割され、(中)百間村、百間東村、百間中村、百間中島村が成立しました。(中)百間村は元禄11年(1698)に天領と岩槻藩小笠原氏領に分かれたことで、天領を百間村又は百間本村と呼ぶようになり、百間領27ヶ村(現在の宮代町、白岡市の一部、春日部市の一部、久喜市の一部)を代表する村となりました。

百間本村は明治8年(1875)に関係のある新田の逆井(さかさい)百間村新田、 百間四ヶ村(しかむら)請新田、午高入(うまたかいり)百間村新田を吸収し、明 治22年に百間中村、百間東村、百間中島村、百間西原組、百間金谷原組、蓮谷村と 合併し新たな百間村となりました。この時の百間村の人口は2,908人でした。昭和 30年(1955)には須賀村と合併し、宮代町が誕生します。この時の宮代町の人口は 10,755人でした。ちなみに平成28年6月現在の宮代町の人口は33,588人です。

百間本村の飛び地と新田

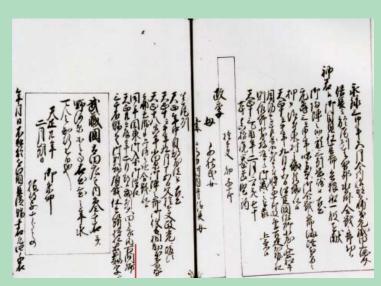
百間本村は宿・川島・切戸地区である程度まとまっていますが、姫宮や西原、山崎などにも飛び地がありました。姫宮の飛び地は元々御林(領主直轄の林)であった場所で民家は1軒のみです。西原にも飛び地があり1軒の民家がありました。

この他、新田としては享保9年(1724)に開発された逆井百間村新田、寛延2年(1749)に開発された午高入百間村新田、明和8年(1771)に開発された百間四ヶ村請新田がありました。逆井百間村新田の西側に隣接した百間四ヶ村請新田は百間東村、百間中島村、百間中村、蓮谷村の入会(いりあい)の秣場(まぐさば・雑木林)を開発した新田です

逆井百間村新田は民家が2軒、百間四ヶ村請新田は民家が4軒ありましたが、古 利根川沿いの午高入百間村新田は民家がありませんでした。

百間本村の領主

百間本村は元々、百間村の一部 で戦国時代は岩付城の後北条氏に 属していたと推定されます。小田 原北条氏が滅亡すると徳川家康は、 関東に入国し、文禄元年(1592)、 百間郷3,000石を旗本服部与十郎 政季に与えました。その後、元和 5年(1619)に政季の長男の政信が 静岡県の敷知郡(浜松市周辺)に



諸家系譜 服部 (国立公文書館)

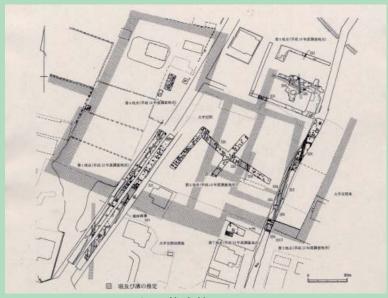
移封され、天領となり検地が行われました。そして、寛永元年(1624)、百間郷(須賀村も含む)は1,000石が朽木民部稙綱に、1,000石が旗本池田帯刀長賢、1,000石が旗本永井豊前守直貞、200石が岩槻藩阿倍備中守正次に領地が分割されました。この時、後の百間本村は旗本朽木氏の支配となりました。

朽木民部稙綱は徳川三代将軍家光の側近として台頭し、寛永 13 年には1万石に到達し大名となりました。そして、正保4年(1647)には鹿沼藩主となり、慶安2年(1649)に土浦藩主となるまで、(中)百間村を支配しました。その後、天領となり元禄16年(1703)には久喜藩米津(よねきつ)氏領となり、宝暦13年(1763)には佐倉藩堀田氏領となりました。その後、幕末まで領主は変わりませんでした。

西原地区で発見された百間陣屋

平成12年6月、県道蓮田杉戸線の改修工事に伴う発掘調査の結果、大規模な堀や掘立柱建物跡、井戸などが多数発掘されました。この周辺は旗本服部権太夫の屋敷があったとの伝承から旗本服部氏の百間郷支配のための百間陣屋と考えられています。その後、数回に渡る発掘調査の結果、旗本服部氏が百間郷を支配した文禄元年(1592)から元和5年(1619)にあたる16世紀後半から17世紀初頭の遺物が多いことや17世紀初頭に堀が大きく造り直されていることも明らかとなりました。

出土した遺物は、15世紀後半から16世紀前半のものも多く見られるため、戦国時代の城郭を再利用し陣屋を構築したようです。その後、元和5年に服部政信が遠江国敷知郡へ転封した時に陣屋は取り壊され、元和9年に旗本朽木稙綱が百間村1000石を与えられた時に再構築したと推定されます。その後、「百間代官」の曽根五郎左衛門吉広が延宝3年(1675)に職務を免じられるまで使用していた可能性もあります。江戸時代前期の旗本は自分の領地を支配するため領地内に陣屋を設けていました。



堀の推定範囲



掘立柱建物跡 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団)



内堀と外堀

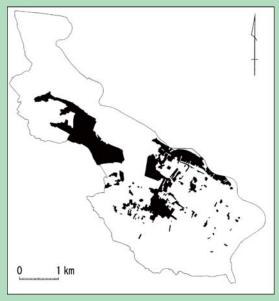


外堀と橋脚跡

佐倉藩領百間本村

百間本村は埼玉郡の佐倉藩領の中心的な村で した。そのため、廻状(回覧板)には百間本村 が筆頭に記され、最後に百間本村に戻されまし た。本来は最後の村から佐倉藩の役所に戻すよ うにとありますが、返却されなかったため、多 量の廻状が残っていたようです。

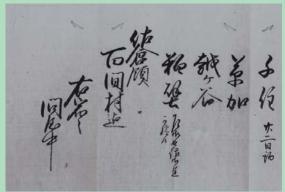
また、先触(さきぶれ)や順達と呼ばれる佐 倉藩から領内への通達も、佐倉から船橋、千住、 粕壁を通り百間本村へ伝えられました。日光御 宮代町内の佐倉藩領 (東粂原村は他領含む)



成道の大門宿や岩槻宿を通り、百間本村に伝えられる先触もありました。

百間本村は到着した通達の内容を埼玉郡の佐倉藩領に伝える役割がありました。 この他、佐倉藩の役人が埼玉郡に来訪する時は、百間本村に行きました。百間本村 名主の折原家の屋敷には「離れ」があり、そこが佐倉様(佐倉藩御役人)専用の部 屋との伝承が残っています。

このように百間本村は佐倉藩の埼玉郡内を統括する役所的な役割のある村でした。 ちなみに、佐倉藩領の埼玉郡に属する村は、羽生市の簑沢村、下藤井村、上藤井村、 加須市の小濱村、北篠崎村、久喜市の青柳村、宮代町の東粂原村、蓮谷村、百間本 村の9ヶ村でした。



先触 宿場への人馬の手配 (折原家文書)





昭和50年の折原家航空写真

廻状 (折原家文書)

百間本村の名主

村役人とは、一般的に名主・組頭・百 姓代をいいます。名主は、現在の村長の ような役職で、基本的には村や領主ごと に1名いました。百間本村でも1名が確 認できます。

百間本村(分村以前も含む)の名主は、 宿地区を開発したと伝わる松永源太左衛 門の祖先が勤めてきました。その後、10 代に渡り名主役を勤めてきましたが、最 後の源太左衛門は親の源太左衛門が早世 したため、12・3才で名主を務めること になりました。その後、弘化元年(1844) まで名主を務めているようですが、村の 年貢を払うため多額の借金をしたことや 病気になったことなどが原因で名主役を 辞めます。

弘化2年から3年までは名主不在で、 組頭の折原清次郎や大高兵左衛門、島村 幸蔵、金子喜十郎などがその責任を負っ ていましたが、弘化4年3月からは組頭

(宝永4)

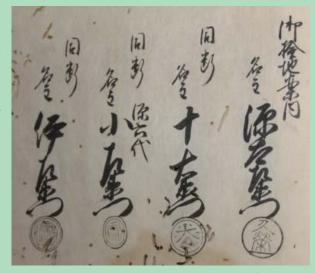
折原家系図

松永家系図

の折原清次郎が名主役を勤めることになりました。その後、嘉永7年(1854)1月 には長男の清輔が名主として確認できます。清輔は、明治元年頃清左衛門に改名し、

更に明治5年7月18日、栄清に改名し、弟 で養子の清次郎に家督を譲りました。栄清 はその後、第六区副区長や百間村戸長、杉 戸宿戸長、第六区区務所詰戸長など区務所 の業務に従事しました。

清次郎は、明治7年、百間西原組と百間 村の戸籍事務統合により副戸長となり、更 に、明治12年、百間6ヶ村は戸長役場を統 一し筆生となりました。



百間村検地帳の名主(折原家文書)

百間本村の組頭

組頭で最も古く確認できるのは元禄10年(1697)の深井勘兵衛、金子三郎兵衛、 折原三郎右衛門、新井孫左衛門、尾花市郎左衛門です。その後、元禄11年や元禄16 年でも名主1名で、組頭は宿から3名、川島から3名の体制が続いたようです。宝暦12年(1762)には七兵衛、利兵衛、孫左衛門、市郎左衛門が組頭でした。明和8年(1771)には弥源二が組頭として確認できます。天明6年(1786)には尾花市郎左衛門が組頭で名主代を、文政11年(1828)には金子斧七が組頭を勤めました。

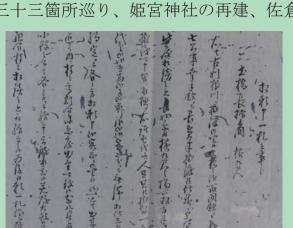
天保期 (1830 \sim 1844) に入ると組頭としては折原清次郎と金子斧七が認められますが、斧七は天保 11 年 (1840) 以降、確認できなくなります。

弘化2年(1845)は名主が不在であったことから、折原清次郎、大高兵左衛門、島村幸蔵、金子喜十郎の4名体制となり、弘化4年に清次郎が名主役となったことから組頭3名となりました。幸蔵は弘化5年を最後に組頭としては確認できなくなったため、組頭は兵左衛門と喜十郎の2名体制となりました。

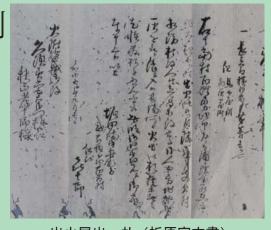
安政4年(1857)には、喜十郎は孫の清吉に組頭役を譲りました。文久2年(1862)からは池上重右衛門が、慶応3年(1867)からは金子儀八も組頭役に加わりました。こうして、宿の金子清吉、金子儀八、川島の大高兵左衛門、切戸の池上重右衛門の組頭4名体制で明治維新をむかえました。

百間本村の出来事・役割

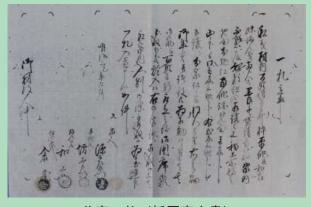
百間本村では、笠原沼をめぐる水争い、青林寺の火災、名主の交代、村人民家の火災、洪水による清地橋の建て替え、高札場の建て替え、洪水被害者のための村人の助け合い、道普請や助郷の免除願い、本家から分家の独立、伊勢参詣からの西国三十三箇所巡り、姫宮神社の再建、佐倉藩領埼



清地橋架替組合連印一札(折原家文書)



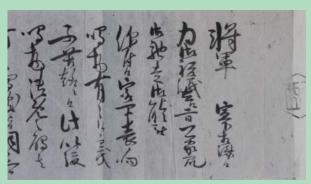
出火届出一札(折原家文書)



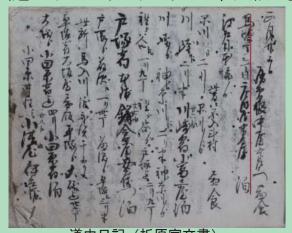
分家一札(折原家文書)

玉郡の中心的な役割、百間村(百間本村・百間西原組・百間金谷原組)の代表としての役割、百間領27ヶ村の筆頭村としての役割など、様々な出来事や役割があったようです。古文書が残るということは何か問題があった時だけですので、日常はもっ

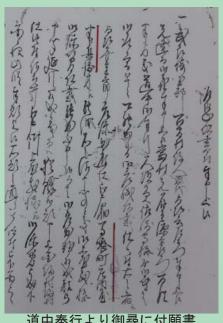
と様々なことがあったのでしょう。



徳川家茂将軍宣下に付廻状(折原家文書)



道中日記 (折原家文書)



道中奉行より御尋に付願書 (大高家文書)

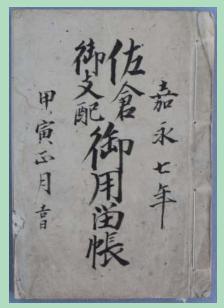


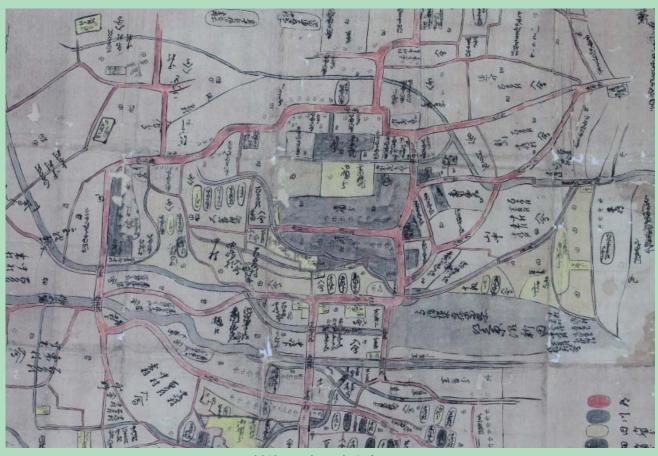
新春挨拶状 (折原家文書)

天保 12 年 (1841) の道中日記には、初日の宿泊先として馬喰町の庄内屋 半兵衛が見られます。弘化 2 年 (1845) の大高家文書の願書にも公用で江 戸に行く際に馬喰町の庄内屋へ行っています。安政 6 年 (1859) の新年の 挨拶状は馬喰町の庄内屋半兵衛から百間本村名主の折原氏にあてたもので す。このように、江戸での宿泊先は定宿が決まっていたようです。



大谷耕地道絵図(折原家文書) 佐倉·御支配御用留帳(折原家文書)





百間村絵図(折原家文書)



百間村絵図 (折原家文書)



埼玉郡絵図 (折原家文書)

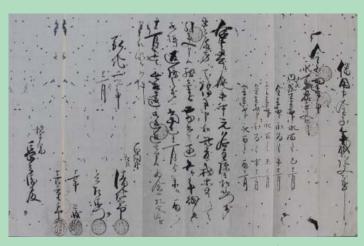
百間本村の商人・職人

百間本村には商人や職人は少なかったようです。文政 12 年 (1829) の取り調べでは伊左衛門と斧七、忠七が居酒屋でした。明治 7 年 (1874) の埼玉県第六区の取調べでは質屋が小河原次郎左衛門と金子喜助であることが分かります。

屋号で伝わるのは、折原清次郎家がアブラヤ、金子斧七家がカミノコンヤ、金子喜十郎家がタナ、金子栄助家がカジヤ、鷺谷重次郎家がフドウサマ、島村金兵衛家がイナリサマ、尾花清右衛門家がゲタヤ、鷺谷常次郎家がウエキヤ、島村幸蔵家がカサヤ、鷺谷寅蔵家がセンドウ、尾花健蔵家がオシショウサマ、深井庄八家がトリヤなどの農間余業に係る名称が屋号となっています。

名主の交代

百間本村で名主の交代として大きいものは、松永家から折原家への変更といえましょう。それまで、松永源太左衛門家は10代に渡り名主役を勤めてきましたが、最後の名主の源太左衛門は、村の年貢を払うため、杉戸宿の伊勢屋長兵衛に金5両1分の借金をしたことや病気になったこ

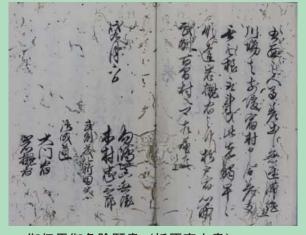


金子借用年賦証文 (折原家文書)

となどが原因で名主を辞めたようです。その後、清次郎などの組頭は杉戸宿の長兵衛と借用金の5年間の月賦払いについて証文を取り交わしています。村方の借金は

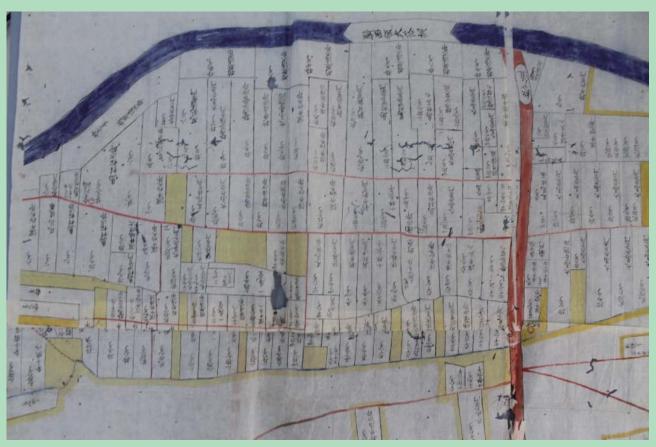
このように次の村役人に引き継がれることもありました。

弘化2~3年(1845~1846)は組頭の折原清次郎、大高兵左衛門、島村幸蔵、金子喜十郎の集団体制で、弘化4年からは清次郎が名主役となり、それ以降、清輔(清左衛門)、清次郎(金次郎)と折原家が名主や副戸長を受け継ぎました。

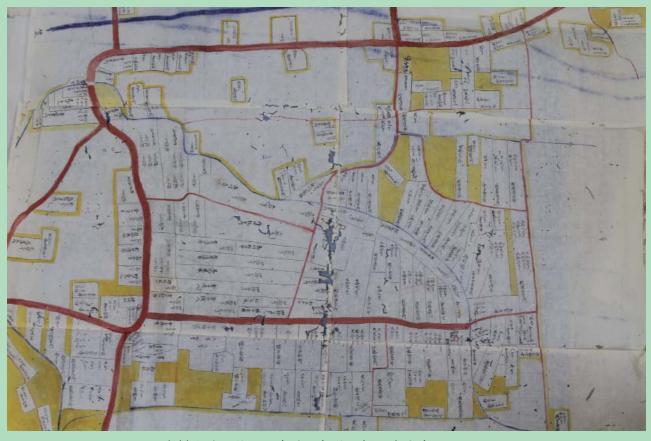


御伝馬御免除願書 (折原家文書)

この文書には天保9年(1838)の先触、天保13年(1842)の杉戸宿助郷免除願と関係する村の石高などが記されています。天保9年の先触は、佐倉藩役人の向嶋真兵衛と木村忠三郎が百間本村へ行くため、藤八新田(川口市安行)を明日9月7日朝6時に出発するので、御成道筋の大門宿と岩槻宿では人足4人と馬1匹を用意するようにとあります。



百間本村土地区分図 川島地区部分(折原家文書)



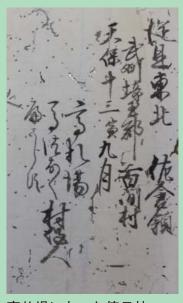
百間本村土地区分図 宿地区部分(折原家文書)

この絵図は、明治6年(1873)頃の百間(本)村の一筆ごとの土地区分図です。彩色されているため非常に綺麗な絵図です。この後、百間7ヶ村では明治10年に現在の地番図に引き継がれる字単位の地籍図が作成されました。

百間本村の高札場

幕府の命令や掟書きを住民に知らせるため、木の札に書かれたものを高札といいますが、この高札を複数枚まとめて、目立つように高く掲げられた場所が高札場です。現在の官報掲示板と同じです。通常は村や領主ごとに1か所あり、名主の自宅前や神社仏閣、主要な道路が交差する村の中心地にありました。

百間本村の高札場は、村の南西側に「従是東北 佐倉領」 と書かれた傍示杭(ぼうじくい)と同じ場所にあったこと が分かっています。傍示杭には高札場に馬をつないではい



高札場にあった傍示杭 (折原家文書)



高札場建替願(折原家文書) けないと書かれています。

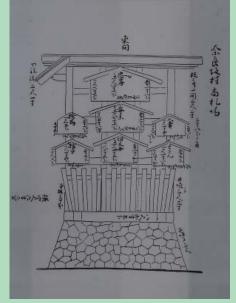


百間本村の高札場跡推定地

百間本村の南西にある公共的な場所は神明神社だけですので、百間本村の高札場は神明神社と推定されます。ちなみに百間西原組の高札場は現在の島村輪業付近です。



旧中山道 追分宿 高札場



高札場設計図



折原家文書が発見された土蔵







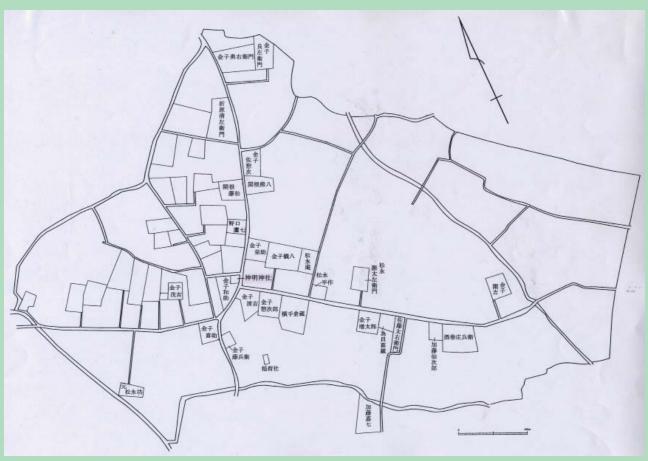
折原家文書が発見された文書箪笥

この文書箪笥は百間本村の名主折原家で見つ かりました。三組諸割合向、県庁納手形、用悪 堀々書、氏神並小社書類、入籍送籍書、戸籍帳 など細かく引き出しに書かれ貼られています。 県庁は明治時代ですが、三組(百間本村組・百 間西原組・百間金谷原組)は江戸時代ですので、 江戸時代から明治時代に随時張り紙を修正して 使用されていたと推定されます。

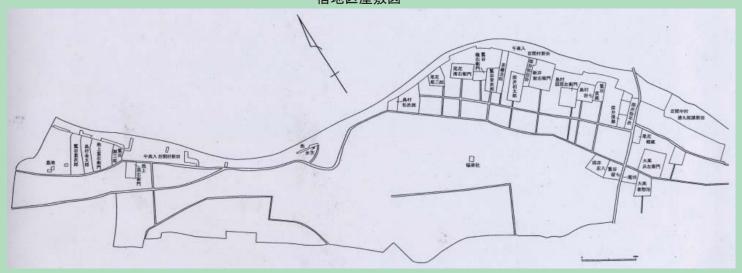
調査風景



百間村絵図 (折原家文書)



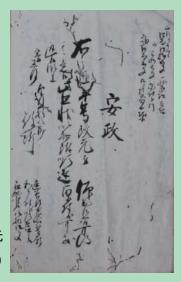
宿地区屋敷図



切戸·川島地区屋敷図



百間本村住宅図 (折原家文書)

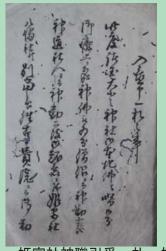


御用留 安政への改元 (折原家文書)

百間本村の神社

姫宮神社は百間領の総鎮守と伝わります。実質的には百間本村、百間中村、百間 西原組の鎮守(村社)でした。姫宮神社の本殿は正徳5年(1715)に、拝殿は文久3 年(1863)に建築(再興)されています。この他、百間本村の神社としては、宿地 区の鎮守である神明神社があります。神明神社には高札場と佐倉藩領の境界を示す 傍示杭がありました。百間本村の中心地といえます。この他、宿地区の南側(字前田) には稲荷神社がありました。現在、稲荷神社は青林寺境内に移転しています。

川島地区では桜稲荷神社があります。元々は百間公民館の西隣にありました。伝 承では宝暦 13 年(1763)から百間本村の領主となった佐倉藩を称え佐倉稲荷としま したが、あまりに恐れ多いため桜稲荷に変更したと伝わります。実際、宝暦12年の 百間村絵図(折原家文書)には桜稲荷は描かれていませんが、宝暦14年の百間村絵 図(岩崎家文書)で確認できますので本当の事と推定されます。他には午高入百間 村新田には、寛政元年(1789)に百間村川島講中20人でつくった弁天社があります。 元は弁天池と呼ばれる池のほとりにありました。



姫宮社神職引受一札 (折原家文書)





姫宮社拝殿再興寄進状



神明神社 (平成28年)



青林寺境内 前田 稲荷神社(平成28年)



稲荷神社跡(平成28年) 前田



桜稲荷神社 (平成28年)



かつての桜稲荷神社 (平成 10 年)



弁天社 (平成 23 年)

百間本村の寺院と菩提寺

百間本村には松永坊と一庵坊がありました。松永坊は黄檗宗弘福寺(東京都墨田区)の末寺で星谷山と号していました。黄檗宗の総本山萬福寺の明治5年の裏書がある末寺帳にも見られることから、江戸時代には黄檗宗に属していたことは間違いありません。場所は旧勤労者体育センター北側の字山崎19・21番地付近でした。この地を小字で星谷と呼びます。その後、松永坊は松永庵と改称し、明治2年までに現在の宿集会所へ移動しました。また、宗派も黄檗宗から真言宗へと変わり西光院の末寺となりました。この他には、川島に一庵坊があります。深井家が開祖だと伝わります。隣接して宮代町指定文化財の庚申塔群があります。延宝4年(1676)の宮代町で最も古い庚申塔もあります。

宿地区の多くの人は西原の青林寺が菩提寺です。青林寺は山崎の西方の字金塚にありましたが、現在地に移転したと伝わります。山号も星谷山千住院真光坊と号し



真言宗宗門人別帳 (折原家文書)

ていました。青林寺の境内は西光院領 50 石の御朱印地でしたので、青林寺の移転は 天正 19 年 (1591) より前と推定されます。青林寺は弘化 3 年 (1846) 春に本堂の修 復と庫裏の建て替えが完成しましたが、6 月に全て焼失し、その後、再建されました。 切戸・川島地区の多くの人は小渕の浄春院(春日部市)が菩提寺です。この他、金 原の遍照院や道佛の医王院、高野の永福寺(杉戸町)が菩提寺の人もいます。



青林寺 (平成28年)



かつての青林寺(平成9年)



松永庵 宿集会所 (平成 28 年)



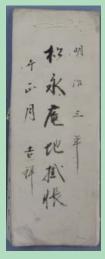
松永坊跡 (平成28年)

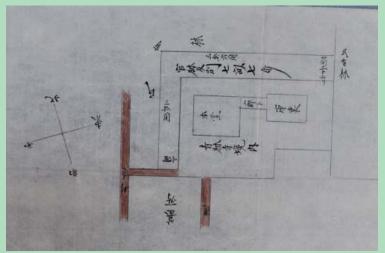


一庵坊 (平成28年)



川島庚申塔群 (平成28年)







松永庵地掛帳 (折原家文書)

青林寺絵図(折原家文書)

青林寺墓地絵図(折原家文書)



明治以降の百間本村

百間本村は、明治時代になると単に百間村と呼ばれるようになります。佐倉藩領であった百間村は廃藩置県により、佐倉県第50区に属しました。佐倉県は浦和県、岩槻県、忍県などと合併し、明治4年(1871)11月14日、埼玉県が誕生します。この時の県庁所在地が岩槻町であったため、岩槻町の属する郡名から埼玉県と名付けられました。

明治7年の百間(本)村(新田含む)は、石高389石、反別87町8畝24歩、戸数56軒、人口352人でした。明治7年4月には百間西原組と戸籍事務を統合し、明治8年6月には逆井百間村新田、午高入百間村新田、百間四ヶ村請新田を編入します。明治12年8月には百間(本)村、百間西原組、百間金谷原組、百間中村、百間中島村、蓮谷村と戸籍事務を統合し青林寺に戸長役場を置きます。明治17年7月には百間6ヶ村に百間東村を加え百間中村連合戸長役場に属しました。

明治22年4月には百間7ヶ村は正式に合併し百間村となりました。当時の村長は中の小島弥三郎で、明治23年には逆井の関根甲子三郎に変更となりました。最後の百間本村名主の折原清輔の孫(甥)である源十郎は明治31年から35年まで助役を務めました。

村役場は青林寺に置かれましたが、大正 14 年 (1925) 12 月、百間小学校校門前の現在の公共施設駐車場に移転しました。学校は、明治 6 年に西光院に進修学校が開校しましたが、その後、百間学校に校名を変更し、明治 9 年には宝生院に移転しました。明治 43 年には、宝生院から現在の百間小学校の場所に移転しています。

昭和30年(1955)7月20日、百間村と須賀村は合併し宮代町が誕生しました。

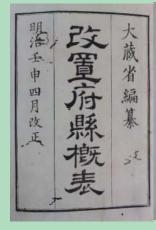
廻状(一般戸籍之規則に付)(折原家文書)

明治4年6月15日の手紙に、20日までに東京に来るようにとあります。今回、府藩県に一般戸籍を導入するため、佐倉藩の戸籍係の宮崎大属は各村にひな形を渡すこととなりました。代表であった百間(本)村の名主折原清左衛門は蓮谷村、粂原村、新川通村の名主と相談したいので7月1日に杉戸宿の旅籠屋中屋源兵衛宅に来るようにと廻状を回しました。



佐倉藩印(折原家文書)



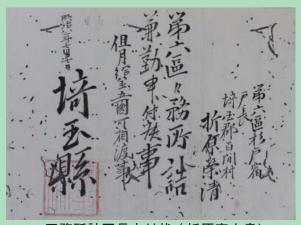




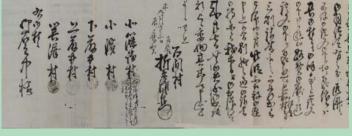
佐倉県管轄所第五拾区(折原家文書)

改置府県概表(折原家文書)

明治4年11月14日に埼玉県が成立しました。明治5年4月刊行の改置府県概表に、埼玉県の県庁所在地は岩槻と記されています。ちなみに、入間県が川越、足柄県が小田原、印旛県が佐倉に県庁がありました。

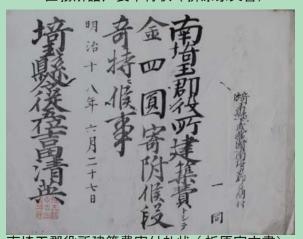


区務所詰戸長申付状(折原家文書)



元佐倉藩主の堀田氏は、東京に帰住したことを祝い、特赦として各村に貸し付けた借金を帳消しにすることに決めました。戸長の折原清左衛門は、代表して東京で各村の借金証文を受け取ってきたため、請書をもって百間に来るよ

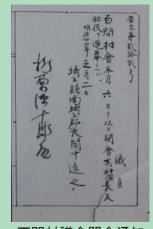
うに廻状を回しました。



南埼玉郡役所建築費寄付礼状(折原家文書)

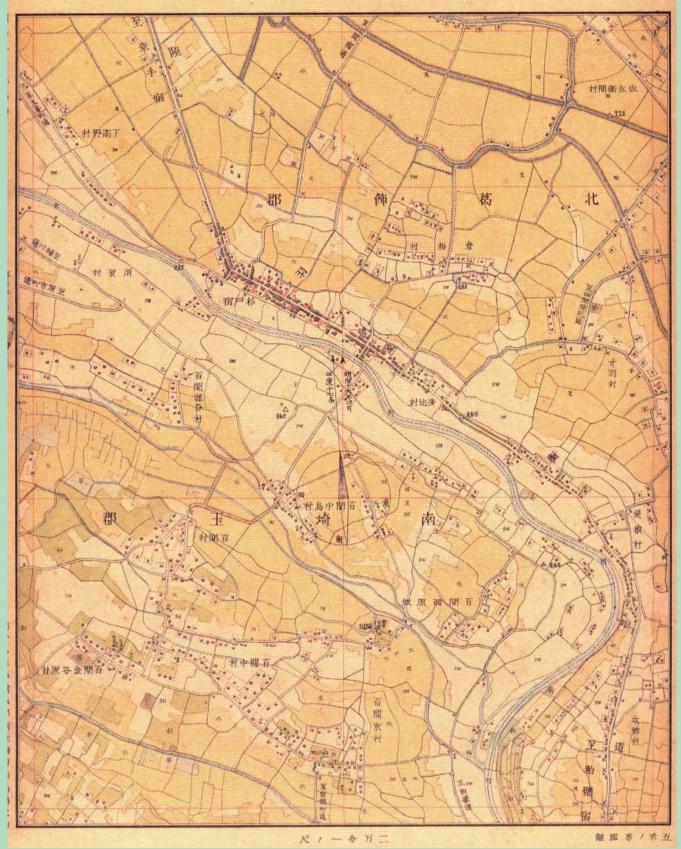


訴訟費用割合契約書 (折原家文書)



百間村議会開会通知 (折原家文書)

村間百郡玉埼南及宿户杉郡飾葛北國藏武縣玉埼



フランス式彩色絵図 埼玉県武蔵国北葛飾郡杉戸宿及南埼玉郡百間村(国土地理院)

この地図は明治 16 年 (1883) のフランス式彩色絵図です。地図は当初、フランス式でしたが、 その後、ドイツ式になりました。百間本村は、粕壁や杉戸、慈恩寺、岩槻、原市、桶川、久喜、 菖蒲、篠津など周辺の宿場や町場へ行くことが出来る交通の要所でした。

LABER 0	80	松此杯巴林	AID SC	東京の年以土	HIS THE GOLDAN	/#.#
佐倉県番号 名前 1 小河原和太郎	屋号	検地帳屋敷	場所 姫宮	嘉永2年当主	取而仅顺	调 有
		1 =====================================	源太宿			2畝20歩の内園吉、久兵衛
2 金子園次郎		1畝12歩	源太宿	庄兵衛	百姓代	20人20多00四国日、久共国
3 酒巻庄兵衛					日姓代	
4 加藤仙次郎		2畝24歩	源太宿	仙次郎		
5 為貝喜蔵			源太宿			/L a ± h ↓ h ≥ . □ / C ← ←
6 加藤嘉七		4畝歩	西原	嘉七 增太郎		他2畝松永平兵衛
7 金子增太郎		5畝1歩半	源太宿	增入即 第二十分 88	72	5畝12歩の内
8 松永源太左衛門		1反6畝歩	源太宿	源太左衛門	名主	oth it out Tile WERE TER
9 松永平兵衛		2畝歩	源太宿	A #		6畝歩の内、平作、半兵衛、五兵衛
10 横手重右衛門	コナヤ	3畝18歩	源太宿	倉蔵		
11 松永庵		-11 -16	源太宿			
12 金子儀八	タナノブンケ	5畝4歩	源太宿		組頭	喜八郎
13 金子惣次郎	カミシュク		源太宿			
14 金子清橋	タナノウチ	1畝12歩	源太宿	喜十郎	組頭	元源太左衛門持、喜十郎、清吉、治門
金子清橘			源太宿			2畝20歩の内金子園吉
15 神明社		15歩	源太宿			
16 金子和助	キカイヤ	8畝12歩	源太宿	斧七	組頭	甚五兵衛、斧七、平吉、次助
金子和助		12歩半	源太宿			5畝12分の内
17 金子喜助		2畝12歩	源太宿			門右衛門地取添源太左衛門
18 金子藤兵衛		The second second	源太宿			長左衛門(安政4年)
19 稲荷社			源太宿	Market Sales		
20 金子茂吉		Margara and	源太宿	Const.		文十郎(安政4年)
21 金子栄助	カジヤ	4畝歩	源太宿	栄助	組頭	三郎左衛門、三郎兵衛、伝五郎、重兵衛、勘次郎、吉五郎
22 野口鷹七			源太宿			新蔵·林蔵(安政4年)
23 関根熊八		1畝15歩	源太宿	熊八		
24 関根藤松			源太宿	The second second		
25 金子佐惣次	サンペイドン	San Carried	源太宿	三平		三平・惣助(安政4年)、与惣兵衛、源左衛門
26 折原清左衛門	アブラヤ	5畝10歩	源太宿	清次郎	名主	清輔、弟金次郎(安政4年)、三郎右衛門、栄清
折原清左衛門	, , , ,	2畝20歩	川島	M 2 Sept	11.00	With the second of the second
27 金子勇右衛門	サイカチド	3畝20歩	源太宿	勇右衛門		
	タッパノウチ	OMPLEO	源太宿	佐市	DISTRIBUTION OF	佐市(安政4年)
29 森田七五郎	77.177		源太宿	ET 112		EID (XXXIII)
30 鷺谷重次郎		4畝24歩	切戸	十次郎		
31 島村金兵衛		3畝18歩	切戸	1.574		
32 池上重右衛門		7畝28歩	切戸	重右衛門	組頭	宇源治(安政4年)
33 鷺谷源三郎		7 HX 2039	切戸	里包制门	利益以民	一十八八人人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人 人
			切戸			
34 池上弥右衛門	マツサマ、カミノウチ	の会かものまた	川島		百姓代	5畝26歩の内、孫右衛門、繁蔵
35 島村松次郎	マプサイ、カミノファ				組頭	
36 尾花菊三郎	ゲタヤ	3畝22歩	川島		不且以見	7畝14歩の内、市郎兵衛、市郎左衛門
37 尾花清右衛門	ブダヤ	3畝13歩				5畝26歩の内
38 鷺谷権右衛門		1畝歩	川島			8畝歩の内
39 鷺谷常次郎		6畝歩	川島			
40 斎藤丑松	II Ham	athough	川島		ép sz	部分の(内なん) 3をことによれるかか サビタ ナーム
41 深井初太郎	リハサマ	7畝24歩	川島		組頭	調次郎(安政4年)、弥伝次は初太郎の弟、勘兵衛、庄五郎
42 深井弥伝次		3畝9歩	川島			6畝18歩の内
43 稲荷社	× - 11	· Frank cont	川島		ADWE	77 de 66° DD
44 新井新右衛門	シンサマ		川島	Variable Same	組頭	孫左衛門
新井新右衛門		3畝9歩	川島			6畝18歩の内
45 島村四郎左衛門	カサヤ	5畝18歩	川島	幸蔵	組頭	幸蔵·七五郎(安政4年)、四郎左衛門、要八、幸七
46 島村岩七		8畝24歩	川島			七右衛門(安政4年)
47 赋谷寅蔵		2畝20歩	川島			
48 深井清蔵	ゴザエモンサマ	1畝24歩	川島			1反19歩、精五郎(安政4年)、五左衛門
49 深井弥平次		5畝9歩	川島	直次郎		1反19歩、直次郎
50 尾花健蔵	オシショウサマ		川島			
51 深井庄八	トリヤ		川島			
52 鷺谷留七	コウシンマエ	1畝17歩	川島	留七		1反19歩
大高兵左衛門		2畝1歩	川島	Service 1		1反19歩内深井清蔵他
大高兵左衛門		7畝歩	川島		-	8畝歩鷺谷権右衛門
大高兵左衛門		3畝22歩	川島	Francis de la companya de la company		7畝14歩内尾花菊三郎
53 大高兵左衛門	オオタカダイジン	3畝24歩	川島	兵左衛門	組頭	元源太左衛門持
54 一庵堂		2畝24歩	川島			5畝18歩
55 大高喜惣次		2畝24歩	川島	喜惣次		5畝18歩
AND THE PROPERTY OF			1-11-11-11	1 300 700 70	-	

百間本村屋敷表

帳	佐倉 名		元禄10年検地帳屋敷地	屋敷面積	石高(元禄10年)		地区	役人(江戸中期)		子孫·先祖
1	47	37	佐右衛門地取添源太左衛門	2畝10歩	3石6斗5升7合	文左衛門跡寅蔵	川島	NO SOMEON	A COLUMN	鷺谷寅蔵
2	17	44	門右衛門地取添源太左衛門	2畝10歩	2石8斗7升9合	喜助	星谷			金子喜助
3	27		権兵衛	3畝20歩	5石9斗1升1合	勇右衛門	源太宿			金子勇右衛門
4	23	13	五右衛門	1畝15歩	1斗5升5合	熊八	源太宿		MELET N	関根熊八
5	48	39	五左衛門	1反19歩	7石4斗2升8合	清蔵、留七、直次郎、兵左衛門	川島			深井清蔵
6	36	27	市郎左衛門	7畝14歩	5石9斗2升8合	菊三郎、兵左衛門	川島	組頭	組頭	尾花菊三郎、市郎左衛門
7	32	26	十兵衛	7畝28歩	4石2斗8升3合	重右衛門	切戸		組頭	池上重右衛門
8	31	25	十右衛門	3畝18歩	4石9斗4升1合	金兵衛	切戸			島村金兵衛
9	30	24	三左衛門	4畝24歩	4石5斗6升4合	重次郎	切戸	The Country of the Co		鷿谷重次郎
10	21		三郎兵衛	4畝歩	8石3斗6升4合	栄助	源太宿	組頭		金子三郎左衛門、勘次自
11	12		藤左衛門		9斗2升8合	儀八	源太宿		組頭	金子儀八、喜八郎
12	26		三郎右衛門	5畝10歩	18石5斗2升4合	清左衛門	源太宿	組頭	名主	折原清次郎、栄清
13	4		徳左衛門		4石1斗5合	仙次郎	源太宿		ENVIOLENCE DE LA CONTRACTION D	加藤仙次郎
14	3		庄兵衛	2畝20歩	19石2斗2升4合	庄兵衛	源太宿			酒卷庄兵衛
15	46		弥八郎	8畝24歩	5石3斗6升5合	幸蔵	川島			島村岩七
16	45		四郎左衛門	5畝18歩	6石3斗5升3合	幸蔵	川島			島村四郎左衛門
17	44		孫左衛門		6石9斗8升2合	市之丞	川島	組頭		新井新右衛門
18	42		伊左衛門	6畝18歩	7石9斗5升3合	市之丞、弥伝次	川島			深并弥伝次
19	55		孫八		5石1斗5升3合	清左衛門、喜惣次	川島			大高喜惣次
20	39		万三郎	6畝歩	4石1斗9升3合	政右衛門	川島			監谷常次郎
21	38		権右衛門	8畝歩	4石1斗9升3合	権右衛門、兵左衛門	川島			鷺谷権右衛門
22	37		孫右衛門	5畝26歩	4石8斗1升3合	清右衛門、松次郎	川島			尾花清右衛門
23	41		勘兵衛		9石5斗7升4合	初太郎	川島	組頭		深井初太郎
24	13	3	四郎兵衛	4畝24歩	12石4斗1升5合	惣次郎	源太宿	1	11 12 12 13	金子惣次郎
25	10		甚左衛門		8石1斗3合	倉蔵	源太宿			横手重左衛門
26	16		甚五兵衛	8畝12歩	7石9斗1升	和助	源太宿			金子斧七、次助、和吉
27	7		七兵衛	5畝12歩	3石6斗6升4合	增太郎	源太宿			金子增太郎
28	5		九右衛門	2畝18歩	8石1斗8升6合	喜蔵	源太宿			為貝喜蔵
29			与惣右衛門	2畝21歩	8石3斗4升5合	清地太右衛門	源太宿			
30	2		久兵衛	2畝20歩	9斗6升	園吉、清吉	源太宿			金子園吉
31	8		源太左衛門	1反6畝歩	70石5斗8升5合	源太左衛門	源太宿	名主		松永源太左衛門
32	14			1畝12歩	12石6斗5合	清吉	源太宿		組頭	金子清橋、治門、喜十郎
33	53			3畝24歩	4石6斗9升9合	兵左衛門	川島		組頭	大高兵左衛門
34	6		善右衛門地取添源太左衛門		3石5斗7升7合	清右衛門、平作	源太宿			松永平作